

いた 悼　　み

木曾明子

葬儀の翌朝、遅ればせながら弔問に伺った私が、奥様から伺った岡先生のご最期は、半年経った今でも生々しく脳裏に刻まれて去らない。といっても控えめにお話下さった概略から、実際のお苦しみを私が理解したと言うつもりは毛頭ない。けれどもその中で「最後に、意識を取った」と仰言った奥様のお言葉に、私は絶句した。「意識を取る」の意味に一瞬戸惑ったが、すぐにそれが「医学的手段によって、生きている人間の意識を取り去る」ことだとわかった。「ここまで痩せられるものか、と思うほど痩せた」と奥様の仰言る段階にまで至られて、岡先生は医師、看護婦、その他の関係者、そして最愛のご家族に感謝と遺志を告げられたあと、病状の進行について受けた医学的説明から正確に計算予測なさった上で、ある時点で「意識を取る」という処置を受けることを医師との間で決められたという。日に日に募る激痛、そして精神的苦しみの限界に立っておられたと思われる。しかしそういう取り決めが交わされているながら、先生の要請に対して医師が、「今意識を取るのは、まだもったいない」と言って躊躇った時点があったという。病人の苦しみを目のあたりにする医師にしてなお、そう言って引き留めざるを得ない言葉には、患者である岡先生の人間性への満腔の哀惜と敬意が滲み出ている。

岡先生が学問を通じてフマニタスを目指され、また果たされたことは、多くの人によって語られている。それは同時に晴朗の高みに至る至福でもあるけれども、志してもまた努力を重ねても、またいかに恵まれた知性の錬磨によっても、容易に到達できるものではない。しかしこのフマニタスを身をもって示された岡先生が、その希有の具現を医学的に抹消されるということ、わが手で終止符を打たれたということほど痛ましい運命があるだろうか。そしてその瞬間われわれはかけがえない存在を永遠に失うということではないか。後に残る肉体が無意味だとは言わない。それは紛れもなく岡先生のものである。けれどもやはり、意識を取り去った後のそれは「なきがら」ではないか。

懐愴なこの場面の癒しであるかのように、私の臉に甦る岡先生のもう一つのお顔がある。若き日のマインツ留学では、ご自身この上なく充実した日々を楽

しまれたと拝察するが、マインツ側の方々にも瞠目すべき東方の少壮学者として強烈な印象を与えたらしかった。後日、私はマインツ大学のシュピーラ氏前夫人と言葉を交わす機会に恵まれたが、話題が岡先生のドイツ語や古典学の並みはずれた学識に及んだあと、夫人はふと「オカは日本人女性からみてもとてもハンサムだろう？」と念を押すように訊かれた。私は一も二もなく同意した。帰国後何かの折に私がそのことを伝えたとき、岡先生のお顔にさっと含羞の色が浮かんだ。私は何かひどく悪いことをしてしまったような気がして、面を伏せた。

岡道男先生の眠りの安らかなことを心からお祈りする。